～「ず～っとずっとだいすきだよ」から～（生徒提示用「おおきな木」での記述例）

番号		名前	
----	--	----	--

条件 ※ネタバレは気にしないで良いものとする

条件1 文章描写を踏まえて、**絵本にあらわれた思い**を根拠に説明すること。

条件2 文章の描写、内容等を**引用する場合は「」**を使うこと。

<p>【結論先行】こんな愛！ ・この本に表れた「愛」は... ・oo（登場人物・作者）にとつ ての「愛」は...</p> <p>【説明】本文を根拠に（引用）</p>	<p>この絵本に登場する「木」にとっての「愛」は相手の幸せを願い自 らを顧みず与え続ける「自己犠牲」である。</p> <p>「木」は、だいすきな少年のために、りんごの実や自身の枝、みき までも与えてしまい、最終的に切り株になってしまう。それでも、年 老いた少年が自分に腰掛けて休んでくれたら「それで木はしあわせ」 なのである。ここから、少年の幸せのためならば自分自身のことを顧 みない「木」の思いが読み取れる。作中、「木」は、少年のことを 「ぼうや」と呼び続ける。「木」にとっては、少年が大人になっ ても、年老いても、かわいい「ぼうや」のままなのだ。ここから私は、 母親が子どもを見るような深い愛情を読み取った。母にとっては、子 どもの幸せのためならば何でも与えることができるのだ。そんな与え 続ける母の「自己犠牲」を、この絵本から読み取った。</p>
--	--

例

【歌】来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来む とは待たじ／来じと言ふものを

訳)「来る」と言っても来ない時があるのだから、「来ない」と言ったのに来るかもと思って待ったりはしません。「来ない」って言ってるのだから …。

①基本分析

【時期／作者】万葉集後期／大伴坂上郎女

【誰の】男性の訪れを待つ女性

【どんな思いが】

約束を守らない男性のことを責めつつも訪れを期待する(気を惹きたい)という気持ち

【どんなところに表れている?】

全ての句の頭に「来(こ)」の音を繰り返すこととリズムを生み出し、「来る／来ない」＝男性の訪れの有無を気にする女性の心情を強調している。

②読み深めるのに必要な歴史的背景

・当時、結婚は～～(省略)

生活・社会制度・結婚制度・身分差
作者が置かれた状況 など

③この歌から読み取れる「愛」? (①②をふまえて)

当時の貴族女性は簡単に外出することはできない。男性の訪れを待つしかない。そのような点から、当時の女性にとつての「愛」は「待つ」ものであったと考えられる。

【和歌】

- ・歴史的背景
 - ・和歌の言葉や表現に表れた思い
 - ・引用「J」
 - ・読み取った「愛」
- 【来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを】
この和歌には、来ないはずの夜でさえ相手のことを考え、期待していないと言いながらも訪れを期待してしまふ女性の思いが表れている。作者である大伴坂上郎女をはじめ、当時の女性にとって恋愛は、男性の訪れを待つものであった。当時の婚姻は、男性が女性のもとに通う「通い婚」が主であった。男性は複数の女性ののもとに通うこともあり、必ずしも毎夜訪れるとは限らない。そのため、女性は男性の訪れを待ち続けることになる。この歌の作者も、全ての句の頭に「来」という音を繰り返すことで、期待していないといいながらも「来る／来ない」という男性の訪れを気にする心情がにじみ出てしまっている。この和歌での愛は、「期待してしまふもの」だと読み取った。

【並行読書】

- ・表れた思い
- ・引用「J」
- ・読み取った「愛」

【夏目漱石「夢十夜」より「第一夜」】

「夢十夜 第一夜」での愛は、「生死を超えた繋がりがり」である。「夢十夜 第一夜」は、夢を題材にした物語で、もう死んでしまふから自分の墓の隣で「百年待っていてください」と言う女性を待ち続ける「自分」の姿が描かれている。死んだ女性を弔い墓の前で待ち続け、最終場面で、自分の前に咲いた白百合を見て、「百年はもう来ていたんだな」と気付く点から、「自分」は生死を超えて女性と再会できたことがうかがえる。このことから、死別してなお百年待ち続ける思いの深さと、生死を超えた二人の繋がりが感じられる。

【自らの考えの変容】

- ①学習前の自分の考え
- ②和歌と並行読書をふまえて自分の考えがどう変わったか
- ③まとめ

私は、愛とは「ドキドキするもの」だと考えていた。好きな人に送ったLINEの反応に一喜一憂し、返信が遅いとしびれを切らして更にLINEを送ったり、時には相手責めようなことをいってしまふこともある。

AとBの共通点は、「待つ」ことである。それぞれの事情は違ふが、相手の恋愛だからこそ、時には「待つ」という状況が発生する。大伴坂上郎女の歌からは、責めるような言葉の外ににじみでる期待の気持ちに、待つ女性の可愛らしさを感じた。また、「夢十夜」からは、相手を信じ、尊重して、ひたすらに待つ愛情があることを知った。私も、責めるばかりではなくもつと伝え方を工夫したり、相手を尊重して気長に待つ余裕を持ったりしなければならぬことに気が付いた。

愛とは、「尊重」であり、「余裕」なのだと思った。

今日はここ!!

★これまでに学習した和歌のなかから一首選び、選んだ和歌からどのような「愛」を読み取ったか、次の条件1～3に従って説明なさい。

条件1

歴史的背景(作者が置かれた状況)をふまえて説明すること。

条件2

和歌の言葉や表現を根拠に、和歌に詠まれた思いを説明すること。

条件3

和歌の言葉を引用する場合は「J」を使うこと。

歴史的背景

- 当時の婚姻は男性が女性のもとに通う「通い婚」が主だった。
- 男性は複数の女性のもとに通うこともあり、必ずしも毎日訪れるとは限らなかった。
- 婚姻届や離婚届などはなく、男性が通わなくなることがすなわち離婚。
- 男性優位の社会であった。

表現の工夫

表現の工夫（表現技法など）とそのねらい

全ての句の頭に「来」という音を繰り返す（反復）ことによって、「来る/来ない」の間で揺れ動く気持ち、すなわち男性の訪れを気にする女性の心情が強調されている。

作者にとっての愛とは

「相手を待ち続けるもの」

まとめ

赤色＝歴史的背景
青色＝表現の工夫

この和歌の作者である大伴坂上郎女をはじめ、当時の女性にとっての愛は「男性の訪れを待つ」ものであった。当時の婚姻は男性が女性のもとに通う「通い婚」が主であった。男性は複数の女性のもとに通うこともあり、必ずしも毎日訪れるとは限らない。そのため、女性は男性の訪れを待ち続けることになる。訪れない男性への唯一の意思表示手段が相聞歌であった。この歌の作者も全ての句の頭に「来」という音を繰り返すことによって、「来る/来ない」という男性の訪れを気にする女性の心情が強調されている。

そのため、私はこの和歌での愛は「相手を待ち続けるもの」であると考えた。

引用

愛の読み取りに必要な描写や言葉

作者にとっての愛とは

まとめ

赤色＝引用（根拠）

青色＝要約

「夢十夜 第一夜」は、夢を題材にした物語で、もう死んでしまうから自分の墓の隣で百年待っていてくださいと言う女性を待ち続ける「自分」の姿が描かれている。死んだ女性を弔い墓の前で待ち続け、最終場面で、自分の前に咲いた白百合を見て、「百年はもう来ていたんだな」と気付く点から、「自分」は生死を超えて女性と再会できたことがうかがえる。このことから、死別してなお百年待ち続ける愛の深さと、生死を超えた二人の繋がりが感じられる。そのため、私は「夢十夜 第一夜」での愛は、「生死を超えた繋がり」であると考える。

～学習を通しての考えの変容・深まりについて記述しよう～

読書・学習前 「愛」とは…

和歌から学んだこと

並行読書作品から学んだこと

読書・学習後 「愛」とは… どのように考えが深まったか